

ゆめの宝石箱

栗田明子



青春ノート 10

ゆめの宝石箱

栗田明子

青春ノート 10



国土社

* 栗田明子 (くりた あきこ)

甲南女子高校卒業後、商社会社、外商秘書、
出版社を経て、日本ユニ・エージェンシーに。
のち大志をまっとうすべく独立し、日本の出
版物の翻訳権を海外に売りこむため奮闘中。
日本著作権輸出センター代表。料理、家事、
読書、スポーツ、何でも好き。何もしないこ
とも好き。



NDC 159

栗田明子

ゆめの宝石箱

国土社 1986

210p 20×16cm (青春ノート10)

ゆめの宝石箱 (青春ノート10)

栗田明子 著

1986年4月15日初版1刷印刷

1986年4月25日初版1刷発行

発行者 鈴木正明

発行所 株式会社 国土社

〒112 東京都文京区目白台1-17-6

☎03(943)3721 振替 東京6-90631

印刷所 株式会社 厚徳社

©A.Kurita 〈検印廃止〉

ISBN4-337-29410-0 C8315

ゆめの宝石箱・目次





失恋 ^{しうれん} としてゆめのプレゼント	94
あこがれの出版界へ	87
〈愛の灯〉	81
ついに東京へ	74
山のあなたの空遠く	68
それぞれのゆめ	60
万華鏡 ^{まんげきょう} のようなゆめ	53
ごちやまぜカメレオン	44
心に太陽を	38
やっばりお嫁 ^{よめ} さん？	33
はじめての試練	28
ゆめを現実 ^{げんじつ} に	23
念力 ^{ねんりき} かけちゃった	16
ゆめは七色	9
はじめに	5



地球市民のゆめ

カテリーナとブラジル嬢

レオナルドとの出会い

三つのシャッポ

絵本の世界へ——無限大のゆめ

ディミトリのゆめ——南北社

パリでひろったゆめ

女二人のゆめ——栗田・板東事務所の誕生

しっぱいしっぱい

カザルスと安野氏

仕事冥利

二つの悲報

果てしないゆめ

あなたに

209

197

189

179

171

163

154

148

142

132

125

117

110

101

装幀 * 中島かほる
装画・さし絵 * 市川里美

はじめに

九歳きいのときでした。母が病気で亡なくなってまもなくのことです。

「明子あきこはお医者さんになる。お医者さんになって、おかあさんのような人なを治なおしてあげたい」と父にいったことがありました。

「だめだよ、女がお医者さんになっちゃ、なかなかお嫁よめにゆけなくなるんだから」と父は、笑わらってとりあおうとはしませんでした。

十八歳さいのとき、高校を卒業しようというときも、父は、「女が大学に行ったらお嫁よめのもらい手がなくなる。大学出の女がなれるのは、せいぜい学校の先生ぐらいなんだから」といいました。

そのとき、とくに学校の先生になりたいとも思わず、そうかといって、これといった自分の未来像を描えがいてもいなかったわたしは、古風な父のことばに反論はんろんすることもなく、高校を卒業すると商事会社に入り、平凡へいぼんな事務員になりました。

そしていまは、父が望んでいたかもしれない結婚はせずに、ロンドンをベースに、日本の出版物の翻訳権を海外の出版社に売るため、ヨーロッパ各国やアメリカをまわっています。

「人生は旅」を地でいく生活を、亡き父は、苦笑いしながらみているのではないでしょうか？

「男性天国の日本で、あなたがここまでやってこられたのは奇跡よ。さぞかしいろいろな苦労があったでしょうね」と、フランスの女性編集者にたずねられたことがあります。

でもわたしには、自分の歩んできた道が、ごくしぜんの道だったように思えるのです。それはイバラの道でも、血みどろの闘いでもありませんでした。岐路に立ったそのときどき、自分で自分の道をむりなく選んできました。

ただ、いつも、ゆめや希望をつめこんだわたしの〈宝石箱〉を、大切にかかえていました。

両親、兄妹、祖父母、叔父、叔母、従兄弟たち、恩師、先輩、友人、恋人、上司、同僚——そのときどきに出会った人たちの血のかよったことばや、読者から

ひろったことばを〈ゆめの宝石箱ほうせきばこ〉に入れては、希望を大きくふくらませていました。

特技といえ、小さな幸せを、いつも大切にすることでした。

そんな楽天性を支えていたのは、泳ぎや山歩きなどスポーツがすぎなために、しぜんに鍛えきたられた健康な身体と、周囲の人たちの愛情やほげまじだったように思えます。

けっして奇跡きせきではなかったわたしの軌跡きせきを、フランス人編集者の疑問に答えるためにも、卒直につづってみようと思います。

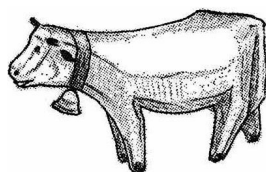
〈ゆめの宝石箱ほうせきばこ〉を開けてくださいますか？

ゆめは七色

わたしがスイスのおとうさんと呼んでいる、エミール・ビュラー氏は七十六歳。レストランヘスイス・オールド・ハウスの片すみで、赤ワインをおいしそ
うに飲みながら、問はず語りに話しはじめました。

「人生にとって三つ大切なことを挙げるとしたら――まず、ほんとうに自分がし
たいと思う仕事を手がけること。つぎに、よい友だちを持つ能力をそなえること。
いいですか、よい友人を持つこと自体よりも、よい友人を持ちうる能力、つまり
人格というかな、人徳かな、それが大切なのですよ。」

そして三つ目は、ゆめを持つこと。どんな小さなゆめでもよい。いつもゆめを
持っていること。たとえば、自然を愛でる心もゆめにつながりますからね。心ゆ
たかに生きる秘訣だと思いますよ」



こういう話をエミールがはじめたのも、わたしと共通の友人でもあり、エミールの片腕かたうでとして長年、国際的な共同出版の編集実務にたずさわっていたフランシス・ピーターズさんが、ゆめのようなハプニングがあって、近く結婚けっこんすることになったからでした。

わたしとエミール、フランシーヌとの出会いは、一九七一年夏、アメリカからの帰途きと、スイスのルツェルンにたち寄ったときにさかのぼります。

はじめての海外旅行でした。

おりしも、レオナルド・ダ・ビンチの「マドリッド手稿しゅこう」試し刷りためずが行われている最中で、印刷見本が何種類も、エミールの机つくえの上にならべてありました。

裏うらうつりしているレオナルドの筆跡ひつせきを再現さいげんさせながら、八色を用い、手書き原稿こうの古びて黄ばんだ色を、いかに原物げんぶつどおりに復原ふくげんするか苦心していました。

ルネッサンスが生んだ万能ばんのうの天才、レオナルド・ダ・ビンチの手稿しゅこうがマドリッドで発見されたことは、二十世紀の最大の発見の一つとして、一九六七年に「ライフ」誌しに紹介しょうかいされています。

そのころタイム・ライフ社に勤つとめていたこともあって、記憶きおくしていました。

でも、それが復刻出版されつつあるのは初耳で、その経緯を、エミールから興奮して聞いたものです。

全世界の限定出版で、アメリカ、イギリス、ドイツ、イタリア、スペイン、オランダ、日本の七か国が、共同出版することにきまりました。

エミールの事務所は、各国の出版社と連絡を密にし、手順にぬかりのないよう作業の進行を受け持つ、「扇の要」役となっていました。

九人のスタッフの家父長といった感じのエミールは、慈父のように編集者たちに接し、フランシーヌは、きびきびと仕事をこなしながら、しっとりとした女らしさをただよわせて、仕事での女房ぶりを発揮していました。

家族のようなチームワークのよさが、気持ちよくうつりました。

フランシーヌは二十代半ばで離婚し、三人の男の子を育て上げ、すでに長男は孫までいるとのこと。その若わかしさにびっくりしました。長身でプロボーシヨンのよい身体にさりげなくスーツを着こなし、挙措も美しく、身のこなしがリズムカルで、「あのように美しく年をとりたい」と思わせる人でした。

一時は、末の息子をとつぜん失い、悲嘆にくれていたようですが、もちまえの

明るさでそれを克服し、仕事と孫の世話とを楽しんでいたようでした。最近、夫人を亡くした建築家とふとしたことで知り合い、たちまち意気投合して結婚の話になったのでした。

仕事の上の片腕を失ったエミールは、さびしいにちがいないのですが、心からフランシーヌの幸せを喜んでるふうでした。

六十歳をこえて、ふたたびよき伴侶とめぐり合い、自分の家庭を持つというゆめのかかったフランシーヌ。いまごろは、どういうゆめを持って南フランスにくらしているのでしょうか。

これまでに、本造りのために集めた資料をもとに、こういう本を造るには、この美術館や博物館に行けば、必要な資料が得られる、というインフォメーション・サービスの仕事をするつもりよ、とはりきっていました。

建築家のご主人が設計した南仏の資料室で、その整理をはじめていくことでしよう。

ところで、いま、あなたのゆめは、どういうゆめでしょうか？
すてきな恋人をみつけること？



結婚してスイート・ホームを持つこと？

母親になって子育てに専念すること？

テレビ・タレントになること？

スチュワーデスになって飛びまわること？

ブティックを持つこと？

ファッション・デザイナーになること？

バレリーナになること？

.....

自分のゆめにむかって努力をするのは楽しいことだと思いませんか？ わたしも、そのときどきにことなつたゆめをいだき、そのゆめを追いつづけて、現実になづけてきたのです。

シュリーマンの伝記を読んだときは、幼いころから壮大なゆめをいだいて、まわり道をしながらも、ついに実現させたシュリーマンの喜びを思いやり、考古学にとりくんでみたいと思ったりしました。

有吉佐和子さんの『女二人のニューギニア』（朝日新聞社）を読んだときは、抱腹